

学童疎開

皆さんおはようございます。まずこの写真を見て下さい。この写真は今から67年前の東京です。何か気のついたことはありますか？そうですね。一面の焼け野原です。爆弾が落ちた後です。

67年前、日本はアメリカなどと戦争をしました。そして戦争に負けました。

負ける前、東京では、戦争にそなえて、都会の真ん中に防空壕という穴を掘ったり、火を消す訓練や爆弾から逃げる訓練なども行ったりしていました。

東京の人たちは「東京も危ない」「私たち大人よりも未来のある子どもたちは何とか生き延びてほしい」と考えるようになりました。

そこで、「田舎ならば、武器工場もなければ、国の役所もないので、爆弾が落とされるようなこともない。せめて子どもたちだけでも安全な所に移そう」ということになり、主に小学生を田舎に移すことを始めました。これを学童疎開と言います。

都会の子どもたちは、いなかのお寺や旅館などに泊まり、いなかの学校に通いました。お父さんやお母さんはお仕事があるので、東京など大都会に残りました。やってきた小学生の中には、おうちの人と離れた生活や、汁とやさいだけの食事などの生活が嫌になって、線路の上を東京へ向かって歩き出した子どももいたそうです。

今日のお話は、波田でも受け入れた学童疎開のお話です。

やってきたのは東京都世田谷区立奥沢小学校の子どもたちでした。写真は現在の奥沢小学校の様子です。89名の子どもたちが盛泉寺に泊って生活を始めました。

実際に東京から疎開した子どもたちがかいた、宿泊した盛泉寺での様子やそのころの波田小学校の絵があります。それが奥沢小学校に残っていました。いくつか紹介します。残りは掲示板にはっておきますね。

起床はラッパの音で起きるのだそうです。先生に起こされて起きる人もいたそうです。

この絵を見て下さい。現在の波田小学校と同じ門が立っています。

そして絵の中の文章には、こう書いてあります。「とても良い学校です。先生も40名もい

る大きな学校です。廊下は光っています。庭も広く、とても規律正しい学校です。」

この絵は波田小学校から再び盛泉寺に帰った後の様子です。男の子は先生に髪の毛を刈ってもらっていると記されています

盛泉寺の絵と写真を比べると、真中の「天陽山」という字が写真と全く同じですね。このお寺に子どもたちだけで、しばらく集団生活をしていたのです。

さて、しばらくすると、盛泉寺から小学校に通うのは遠いということで、現在の波田駅のすぐ近くのたてものから通うことになりました。しかし、この引っ越しが思わぬことにつながりました。

昭和19年12月25日、大変寒くてたくさんの雪が降ったそうです。真夜中におきた火事で、引っ越したたてものが焼けてしまったのです。その上、くつ箱もすべて焼けて、履くものがなくなってしまいました。雪がかたくつもっていて、気温もマイナス10度ほどだったようです。その中を疎開児童は、裸足で小学校に逃げたのです。

東京から疎開してきた子どもたちは、真冬の12月に、寝る場所もなければ、勉強する本やノートや服もなくなってしまいました。

さあ、このあと89名の疎開児童はどうなるのでしょうか？

このときのことについて、疎開していた子どもで、現在川崎に住んでいる高木さんから校長先生宛に手紙をいただき、その時の様子が詳しく分かりました。

実はここで、当時の波田の皆さんはすばらしいことを行おうのです。その①になります。

火事の次の日、波田の人々がやってきて、子どもたちを1人2人と引き取って自分の家につれて行ってくれたそうです。自分の家にも子どもがいるのに、疎開して寝る場所も食べるものもない子どもたちを引き取ったのですね。

高木さんは、2年3組の蒲生すみれさんの家が昔旅館でしたので、そこに泊めてもらったそうです。蒲生さんの家には、旅館の看板を裏返してこんな看板を立てたそうです。すみれさんのおばあちゃんに借りてきた看板を校長室前に下げておきますので、見て下さい。

さらにすばらしいことを当時の波田の皆さんは行いました。子どもたちは夜遅くに雪の

上を避難したため、足がしもやけやさむさのための傷ができて、うまく歩けなかったそうです。高木さんの手紙によると、

当時はしもやけや寒さでできたきずの薬がありませんでした。そこで、煙草の葉を煎じたお湯にゆっくりと足を入れてくれました。さらに、それでもよくならなかつたので、おぶつて浅間温泉まで連れて行ってくれたそうです。自分の子どもでなくても、波田の皆さんは東京から来た子どもたちを大変大事にしたのですね。

学童疎開は日本のあちこちで行われましたが、都会から移ってきた子どもたちがいじめられたこともあったようです。また、都会にいるお父さんやお母さんに会いたくて、お寺などの宿舎を脱走した子どもたちもいたそうです。

ところが波田では、疎開してきた子どもたちをたいへん大事にしました。

お手紙をいただいた高木さんは次のように語っています。

私は3年生でしたので、波田小学校のクラスに入り一緒に勉強しました。担任の先生は、大変優しい先生で、初めて波田小学校の教室に入った時に、両親と離れて疎開してきたのだから、みんなやさしく親切にしてくださいと話して下さいました。先生の言葉どおりに、波田の子どもたちはやさしく面倒を見てくれました。

皆さんが今暮らしているこの波田の地には、昔から困っている人や苦しいことにぶつかった人たちに、自然と支援の手を差し伸べることができる、やさしさや思いやりの気持ちを持った人々が住んでいるところなんですね。

皆さんにもそんなやさしい気持ちが必ず残っています。今日のお話はこれで終わります。